優秀賞

にしはどこから？

千葉県千葉市　角　文雄

思うにサッカーのジェフユナイテッド市原千葉は、市原市の名を全国的に知らしめた先駆者であろう。そして『市原ぞうの国』は頻繁にテレビで紹介され、五井駅を出発して美しい養老渓谷へ向かう小湊鉄道は今や鉄道マニアはもとより全国的に有名な観光鉄道である。その養老渓谷は最近では国際地質科学連合から『チバニアン』と命名された世界的にも有名な地質時代区分のある場所だ。

また五井や姉崎は京葉工業地帯の中核として市原市のみならず千葉県の、いや日本の高度経済成長期を支えてきた。父はそのような工業地帯の工場に必要不可欠な工業用水を供給する仕事をしていた。

僕が市原市に引っ越して来たのは昭和三十八年、小学校一年生の夏休みだった。千葉市の小学校に入学して学校生活にもようやく慣れたのに、たった一学期で転校するなんて、しかも幼稚園から一緒で席もとなりだった大好きな女の子と離れるなんて子供心にもやるせなかった。でも、父の仕事の都合では仕方ない。

千葉港の近くで生まれ育った僕は物心ついたころから海に親しんできた。埋め立て工事前の千葉の海岸は潮が引くとハマグリ、アサリ、バカ貝がざくざく採れた。父が仕事帰りにちょっと竿を出すだけで魚やワタリガニがバケツ一杯とれて母がさばきれず悲鳴をあげたぐらいだ。そんな海辺の生活から一転して市原の山の生活にかわったのだ。

市原市郡本の高台にある工業用水管理事務所の近くの官舎に引っ越したその日の晩に事件は起きた。虫の大群に襲われたのだ。母が海辺の家と同じ感覚で夏の夜に窓を開けて布団を敷いていたら、部屋の蛍光灯の光に反応した虫が大量に家の中に飛び込んできたのだ。その中にはカブトムシやカナブンといった大きな虫もいて、不気味な羽音を立てて部屋の中を飛び回る様子を見て母や幼い妹は悲鳴を上げていた。僕は壁に這う『はがち』（ムカデ）を見て絶句した。

父が五井の町まで車を飛ばして殺虫剤を買い込んできてその虫たちを撃退したのは夜もだいぶ更けたころだった。

夏休みが空けて二学期になると新しく通う市原小学校に母に連れられて行った。そのころの市原小学校は僕の記憶では確か県道にすぐ面した場所にあり、今にも朽ち果てそうな古い木造の校舎で、今まで通っていた千葉市の鉄筋コンクリートの校舎とは大違いだった。それを見ただけで愕然としたが中に入ってさらに唖然とした。古びた薄暗い教室にいかにも田舎の子供といった面々がいて、担任の先生は山奥から出てきたような老婆であったのだ。

こんな学校行きたくない。こんな市原なんて田舎は嫌だ。僕の心は大きな拒絶反応を示した。ところが話を聞くと少し状況が変わった。

市原小学校は別の場所に新校舎が建てられておりすでに高学年

の生徒はそちらに移転しているとのこと。そして一年生をはじめ低学年も来年から新校舎に移ることになっていたのだ。

僕はそれを聞いて少しほっとした。母も心なしか安堵した様子だった。僕と母はそのお婆さん先生からそういった説明を受けた後に「最後に何か聞きたいことは？」と聞かれて僕は思わず「ありません。お婆さん」と答えて母に大いに怒られたのを今でも覚えている。翌日さっそく新校舎の方に行ってみるとそれは県道から外れていったん坂を下り再び登った小高い山の上にあった。山林を切り開いた広い敷地に運動場と鉄筋コンクリートでできた白くて綺麗な校舎があった。それを見た僕は来年までの我慢だ、来年からはこの校舎に通えるぞと自分に言い聞かせながら帰った。

新しい学校には意外とすぐに慣れた。最初は町から来た子という感じで遠巻きにしていたようだが僕から積極的に話しかけるとすぐに友達になった。しかし方言には少し困った。

「にしはどこから来た？」と友達に聞かれて意味が解らなかったのだ。

「にし？にしって何？」僕が聞き返すと

「お前のことだ」とその子が言い換えて初めて分かった。

『にし』って方角の西のことかと思った。でも確かにイントネーションが違う。方角の西の声調は『に』よりも『し』が上がる後ろ上がりだが、あなたを意味する『にし』は『に』が高く強めで『し』が低い後ろ下がりに発音する。他にも「そうだっぺ」（そうだろう）とか「おっぺす」（押す）とか時々不可解な言葉があったがすぐに馴染んでいつのまにか僕もそんな話し方をするようになっていた。

自宅から新しい小学校まで子供の足で一時間近くかかった。さすがに遠いと思った。自宅から二つの小高い山を越えて行くのだが今思うとよく通ったものだ。でも慣れてくるとそう苦にならず帰りはいつも友達と道草を食って遅くなり母に叱られた。通学路の途中には田んぼや川があり春になるとザリガニやオタマジャクシ、フナやコイなどがうようよいた。僕と友達は道端にランドセルを置いてずぶぬれになって捕まえて遊んだ。

小高い丘の上にある僕の家から学校に通う近道は家の裏手の藪の中を抜けて坂を下りて友達の健ちゃんの家の庭を横切って大堰という大きなため池の前の道にでることだ。

朝は時間短縮のため必ずこのコースを行くのだがこれには一つ大きな問題があった。それは農家の健ちゃん家で飼っている犬だ。しかも二匹いた。いつもは広い庭の納屋の脇の犬小屋にひもでつながれているのだが、時々放たれている時がある。

そんな時こいつらは丘の藪の小道から降りてくる僕を見つけるとものすごい勢いで吠えたてながら坂を駆け上がってくるのだ。

「わー！来るな！」と僕は恐ろしさのあまり大声で叫びながら降りてきた坂を再び駆け上がって逃げた。そして藪の中から様子を伺いながらその犬たちが何かに気を取られているすきにダっと駆け下りて庭を横切り、ため池の前の道に出て集合場所に走るのだ。集合場所では一年生から六年生までその辺の子供たちが集団登校するために全員が揃うまでじゃれ合いながら待っていた。同じクラスの友達の健ちゃんも良っちゃんも既に僕より先に来ていた。

「さっき健ちゃん家の犬が追っかけてきたよ」と僕は健ちゃん家の犬に吠えられたことを訴え、明日はくれぐれもひもでつないでおくようにと頼むのだが、やはり時々犬たちは放たれているのだった。僕はこの時の体験がトラウマとなって今でも犬は嫌いだ。

集団登校といってもみんな途中で山の中に入ってアケビをとったり桑の実を採って食べたりしてなかなか進まない。上級生が早く行かないと遅刻するぞと一喝してようやくたどり着くありさまだった。僕も野イチゴや桑の実を初めて食べてこれはうまいと病みつきになった。

初夏になると学校から帰っても時々母が家にいなかった。家の裏の藪に入ってワラビやゼンマイを採っているのだ。僕もランドセルを置いてさっそく採りに入った。ゼンマイはアクが強かったがワラビは一晩水に浸けておけば翌日には煮つけやお浸しとして美味しく食べられた。また時々父が細長いスコップを持って山に入って自然薯を掘ってきた。僕も何度か父と山に入ったが自然薯は地中深くまで伸びていて注意深く掘らないと途中で切れてしまいなかなかうまく採れなかった。

秋になると栗がたくさん採れて栗の皮むきで手が痛くなった。ここには海が無かったが四季折々の山の幸があり、きれいな緑が目に染みる美しい丘と田畑があった。その自然を毎日身体いっぱいに感じて野山を駆け巡った。

小学校二年生になって母が突然ピアノを習えと言い出した。カワイ音楽教室のピアノの先生が毎週土曜日に小学校の音楽室にきてくれて教えてくれることになったのだ。最初はピアノなんてと思ったがこれが始めてみるとなかなかに面白い。でも家にはピアノなんかない。先生がくれた鍵盤を書いた紙の上で指を動かして練習した。しかしこれでは一向に上達しない。するとしばらくして何と母はアップライトピアノを買ってくれた。小さな妹も大喜びで僕が弾くのを見よう見まねでピアノに触れた。

市原小学校に転校して初めての夏休に大変な試練が訪れた。朝のラジオ体操だ。当時は夏休みの間ずっと毎朝六時からこのラジオ体操があり配られた出席カードにハンコをもらうことになっていた。場所は学校に行く途中の神社の境内で、家からそこまで歩いて三〇分ほどかかった。ということは毎朝五時に起きて準備しないと間に合わない。友達の健ちゃんは農家なので早起きらしく、毎朝五時過ぎには早くも僕を迎えに家に来た。僕はたまらず三日で音を上げて行かなくなった。夏休みの登校日に先生にその出席カードを見せるのだが、先生は日付欄にハンコがない僕のカードを呆れた様子で見つめていた。これから毎年夏休みに毎朝五時起きではたまらない。

母もそう思ったのか次の夏休みから僕を富山のおばあちゃんの家に行かせることにした。もともとお盆の時期に行っていたのだが母は夏休みになると早めに僕と妹を富山に連れて行ってしばらく滞在してから先に帰り、お盆に父が来て連れて帰るというパターンで約一か月近く富山にいた。よって体操カードは欠席ではなく不在扱いとなり一件落着となった。

その年の十月、東京オリンピックが開催された。家族で白黒テ

レビの前に集まって開会式を見た。空に自衛隊のジェット機が白い五輪を描く映像が子供心に印象深かった。ここからもあの五輪の雲が見えるかもしれないと思って外に出て青い空を見上げたが市原からは見えなかった。

小学三年生になって、自転車を買ってもらって乗れるようになると行動範囲は一気に拡大した。毎日学校から帰ると自転車に跨りいろんな場所を探索した。父の職場の管轄である工業用水用の山倉ダムや国分寺、国分尼寺跡などを走り回った。山倉ダムはとても大きな湖のような静かで穏やかなダムで、発電用ダムのように扇状のコンクリートから放水されているようなイメージは全くない。なだらかな斜面を降りて行くと水辺に魚が泳いでいるのがよく見えた。ここには後に『こどもの国』という娯楽施設が出来て、大人になってから自分の子供たちを連れてよく遊びにいったものだ。特にゴーカートが面白く子供そっちのけで何回も並んで乗った。いったん閉園したようだが現在は『こどもの国キッズダム』として再開し賑わっているようだ。

国分寺跡は当時はただの草っ原で、石碑か何かがあっただけと記憶している。子供だったので国分寺が何なのか単なる昔の寺の跡ぐらいにしか思っていなかった。

最近になって復元された国分尼寺跡を訪問し、資料館でその歴史を見てそこが古代日本の重要な場所でかつ千葉の中心地であったことを知って深く感銘を覚えた。子供のころ思っていた市原って田舎じゃなかったんだ。いや田舎どころか千葉の、いや房総の中心地でいにしえの都と深いつながりがあったんだ。

辰巳団地にもよく出没した。当時は県道以外は未舗装の砂利道で自転車を必死に漕いで能満の坂を上がって辰巳台の入り口にたどり着いたのを覚えている。団地という響きは当時は最新の町として憧れの的だった。近代的なアパートが建ち並び商品が溢れるスーパーマーケットがあったのだ。道で見かける小学生もいかにも町の子という感じで心なしか気品が感じられた。

そのころになると僕は何故か辰巳小学校とか五井小学校とかの子たちに異様なライバル心を覚えるようになっていた。いわゆる町の小学校の子というあこがれと嫉妬だったのかもしれない。いつだったか五井小の子供たちが家の近くまで自転車でやってきた時、友達の健ちゃんと一緒に意地悪を言って追い返したことがあった。

小学四年生のころだったと思う。模型飛行機が学校で大流行した。竹ひごをろうそくの火であぶってまげて翼の骨格を作りその上に薄紙を貼ったゴム動力の模型飛行機だ。小学校の校門の近くに文房具屋があってそこに飛行機の材料や、飛行機セットも売っていた。

特に『セドリック』という名の飛行機セットは人気が高く母にせがんでもらったお小遣いを握りしめて買に走ったことを覚えている。そしてその模型の翼を大きくしたり巻くゴムを強化したりして改造し、どれぐらい遠くに飛ばせるかみんなと競争した。休み時間や放課後に校庭の端にある小高い丘からみんなで一斉に飛

ばして遊んだ光景は今でも忘れられない。

また、リリアンという編み物のおもちゃが流行したのも確かこのころだったと思う。女の子はもちろん男の子まで夢中になって編んだ。授業中も気になって机の下で隠れながら編んでよく先生に怒られた。それでもめげずみんな手を動かして、毎日編んだ長さを競った。

当時の市原小学校は実におおらかで、先生もどこに行ったのか知らないが『自習時間』がちょくちょくあった。自習といっても子供たちがおとなしく教室で勉強しているわけがない。まじめな子は別として大多数は校庭に出て遊んでいた。勉強はあまりした記憶がないが本に興味を持つようになった。きっかけは小学校に当時は珍しい図書館ができたからだ。それまで学校に図書室があったかどうか覚えていないがこの新築の匂いのする図書館は子供心にもわくわく感があった。中には今まで見たこともないほどの量の本が棚にぎっしりと収められていてそれを眺めるだけで自分が賢くなっていくように感じられた。そしてさっそく借りたのが確か『フランダースの犬』という表紙がきれいな本だった。その本を読んで書いた感想文が校内で表彰されたことでその後も色々な本を借りて読むようになった。そのお陰かどうかわからないが国語の成績だけは良かったがその他はあまり振るわなかった。夏休みや冬休みといった休みの前に通知表をもらって帰ると、母が、それ見て激怒し、しばらくは物差しでたたかれて勉強させられた。

小学校五年生になると学校の音楽部に入った。どういういきさつで入ったかは忘れたが僕はアコーディオンの担当になった。アコーディオンなんて触ったことがなかったがピアノを習っていたので先生が差配したのだろう。アコーディオンは僕ともう一人は女の子で、その他に縦笛とトライアングルのメンバーだった。何かの会でみんなの前で合奏することになり「砂漠の隊商」という曲を演奏した。

ちょっと難しい曲で僕は最後までうまく弾けなかったが本番では何と一発勝負でうまくいって一緒に弾いた子と喜んだのを今でも覚えている。そしてその後来年編成される鼓笛隊に参加が決まった。鼓笛隊は運動会の時にパレードを行う音楽隊で六年生全員参加だが隊長以下バトンとか太鼓とか楽器演奏以外はみな後ろに連なって縦笛を吹いて行進するのだ。その楽器演奏メンバーに僕も選ばれて五年生の秋から来年の運動会に向けて練習が始まった。僕はそのままアコーディオンを担当することになった。

そんなある日、夜布団に入って寝ようとしていると隣の部屋から父と母の話し声が聞こえた。小さく低い声で話す中で転校という言葉が出て目が覚めた。

「転校！また転校するのか！」

僕はとても不安になりその晩は一睡もできず気が付いたら閉められた雨戸の隙間から朝の光が漏れていた。

「今度、お父さんが千葉県庁に転勤するから引越しすることになったのよ」と翌朝母から告げられた。ショックだった。しばらくは落ち込んでいたが転校を受け入れなければと思うようになり、ここでの残りの生活を心置きなく楽しもうと思った。魚釣り

が大好きだった僕は近くの川や池はもちろん休日になると父に連れられて養老川に釣りに行った。そして連れた魚を半年ほど前に父が庭につくってくれた池に入れて飼ったりした。その池の魚たちを引っ越し時に持って行こうとして両親に止められ泣きそうになったのを覚えている。

「あのさー、僕転校することになった」

と打ち明けると友達の健ちゃんや良っちゃんは

「ふーん、そうなんだ」と残念そうに言った。

残念と言えば転校が決まったので六年生で編成される鼓笛隊の練習からは外れることになったことだ。とても楽しみにしていたのでみんなが練習しているのを見て残念というか悔しい気持ちでいっぱいだった。

引越し先は千葉市の新しく開発された団地だそうだ。今度の学校はどんなところだろうか?千葉市の新しい団地の学校か・・・

今まで憧れていた町の学校だ。どんな子がいるんだろうか?こんな市原の田舎から来た僕がうまく受け入れてもらえるだろうか?考えれば考えるほど不安になった。

小学校五年生の三学期が終わり通知表をもらって市原小学校の門を出た僕は寂しさを覚えながらも元気にみんなと手を振って別れた。帰り道が一緒の健ちゃんはつまらなそうに無言で歩いていた。

「向こうに行っても手紙書くからさ、絶対に遊びに来てね」僕は何度も同じことを言った。その都度健ちゃんはうんうんとうなずいていた。

約束通り転校した後、新しい家に健ちゃんと良っちゃんは何度か遊びにきてくれたが中学生になってからはだんだん疎遠になり年賀状もいつの間にか途切れてしまった。

新しい小学校は家の二階から見える距離で、歩いて五分もかからなかった。いままで一時間近く歩いて通っていたのに比べると天国のようだった。転校初日、六年一組の教室の前まで担任の先生に連れられて行くと、そこに女の子が立っていた。聞くと彼女も転校生だとのこと。小太りで顔が日焼けで浅黒くいかにも田舎から来た感じの子だ。なんとなく自分と同じ匂いを感じて思わず話しかけた。

「にしはどこから?」

「・・・」その子は何も答えない。そうだ方言じゃだめだ。僕はもう一度聞いた。

「君はどこから来たの?」

「上総湊よ」その子がポツリと言った。

「上総湊?」僕はその地名を知らなかったが市原よりきっと田舎に違いないと思った。

「僕は市原からだよ」僕はそう言って彼女の反応を見たが

「そう」と言うだけですぐにあっちを向いた。

愛想のない子だと思ったが、転校生が僕の他にもいたことでとても気が楽になった。先生に促されて教室に入りみんなに挨拶をした。教室を見渡すとみんな賢そうな町の子供たちばかりだ。僕とその女の子は後ろの空いている席に座ることになった。

「よろしくね」と僕が言うと

「よろしくね」とその子もようやく固い表情を崩して言った。
その子も緊張していたようだ。
その女の子が後に僕の妻になるとはその時は想像だにしなかった。